

# ふるさと納税制度は地域創生に貢献できるのか

## ——「恩恵」と「弊害」から考察する制度の役割とその展望——

社会学部現代社会学科 2122063

指導教員 佐藤 秀樹

氏名 成沢 亜璃

### 要旨

本研究は、筆者が抱いた疑問「ふるさと納税制度は地域創生に本当に貢献できるのか」について検討したものである。制度がもたらす「恩恵」と「弊害」に焦点を当て、制度の役割や意義をおさえながら、地域創生への影響について分析した。

制度の利用を巡っては、賛否両論がある中で、ふるさと納税が地域経済や地域創生に与える影響について、成功事例やデータなどをもとに制度に潜む問題点を考察し、「恩恵」と「弊害」を議論した。

第一章序論では、本研究の背景や研究意義、調査法や本論文の構成について述べ、疑問を感じた理由など、本研究の目的について述べた。

第二章では、ふるさと納税制度について理解するべく、制度の概要や歴史、現状などを総務省の現況調査結果などをもとに整理しながら述べた。

第三章では、ふるさと納税制度がもたらす「恩恵」について、成功事例をもとに考察した。寄附金の活用方法や、地域への還元など様々な策略について論じ、制度の役割と地域創生に及ぼす影響を述べた。

第四章では、ふるさと納税制度がもたらす「弊害」について、問題別に取り上げて、論じた。運用上の弊害や社会的公平性の観点からの課題が浮き彫りとなり、制度の改善や利用者の意識改革などが必要不可欠であることがわかった。

第五章では、筆者が独自に行った大学生世代を対象としたふるさと納税の意識調査の結果を考察した。ふるさと納税における若い世代の制度への認知度や関心、返礼品に対する重視度、制度の改善点に対する意識が改めて明らかになった。

第六章では、制度の役割と将来展望について、現行制度の改善案の提案や地域創生の為の活用の可能性という観点から論じた。制度の良さを活かすためには、細かな改善が急務であることがわかった。

第七章結論では、ふるさと納税制度は地域創生のための非常に有効なツールであることを示した一方で、その価値をさらに引き出すには、関係者全員が制度を正しく理解し、適切に運用する努力が求められることを論じた。

本研究を通じて、制度が持続可能な形で社会に貢献するためには、課題を一つずつ解決し、本来の目的に立ち返る運用が必要であることがわかった。